

愛知大学出版助成図書



『エネルギー社会経済論の視点』

大澤 正治（経済学部教授）

はからずも、出版助成をいただく幸運に恵まれた。何気なく使っているエネルギーに関して、色々と視点を変えて考えてみた。

そもそも、エネルギーとは何か。エネルギーは姿も形も見えないが、何かを介してはつきりとわかる。そして、エネルギーがなければ生活できないという。

学生に、日頃、使っているエネルギーは何かと聞くと、蛍光灯という答えが返ってくる。すると、私は、蛍光灯を介して、エネルギーのしごとの恩恵を受けている、と説明する。私たちは、電力会社に電気料金も支払うが、蛍光灯も買わなければ、エネルギーの恩恵を授からない。このように考えると、エネルギーのために私たちが支払うのは光熱費だけではない当たり前のことが理解できるはずである。

話しを変えて、学生に暖房方法の選択を迫るのも愉快である。電気ストーブとガスストーブの比較もけっこう難しい。ある時、賢明な学生がいた。彼は、暖房が不必要となる夏、ストーブが役立つかを考えるという。その点では、電気炬燵が良いという。テーブルとして通年、使える。ストーブでは保管コストがかかると彼は指摘する。

このような話しは、経済学としてオーソドックスに考えることができる易しい応用であるが、どうも、世の中で考えているエネルギーの視野からは排除されている。

だれもが同意する現代的なエネルギーの常識は、化石エネルギーに代替するエネルギーをだれもが待ち望んでいるということである。確かに正しい考え方であるが、問題は、世界のエネルギー消費の9割も占める化石エネルギーからどのように撤退するかである。経済学としては、そのコストを考える。スクラップは、ビルドよりも大変なことである。スクラップしないでビルドするともっと大変なことになる。

色々とっておきたいこと、世の中に聞いてみたいことが多かったが、出版してから思い出したこと、思いついたこともたくさんある。さあ、次の機会のためにエネルギーのストックを始めよう。次回の題はもう決めている。『エネルギー社会経済論の失点』である。（著者）

エネルギーフォーラム 2005年3月 237頁 定価（本体1800円＋税）。



『アルベルトゥス・マグヌス 鉱物論』

沓掛 俊夫（経済学部教授）

西欧ラテン世界において、盛期スコラ学の時代といわれる13世紀に、自然学の広範な分野についてアリストテレスのラテン語訳された著作の註釈やそれに基づく著述を行ったドミニコ会士のアルベルトゥス・マグヌス（Albertus Magnus; 1193?-1280）がいる。彼はトマス・アクィナスの師でもあり、アリストテレス主義スコラ哲学の創始者でもあるが、鉱物界にも関心が深く、『鉱物論 *Mineralium*』全5巻を著した。今回翻訳したラテ